

The University Times

July 2014 Vol. 34

<http://jtimes.jp/utimes>

produced by IELTS by Eiken × The Japan Times ©THE JAPAN TIMES, LTD. 2014

CONTENTS

<ul style="list-style-type: none"> Global Leader's Voice 沼田貞昭さん(鹿島建設株式会社) 1 2 Studying Abroad in the U.S.A 私の米国留学 3 University's Challenge 学習院大学/青山学院大学 4 5 	<ul style="list-style-type: none"> Journalist's Eye アメリカ出身のJ-POPシンガー 国内最大級の洋書売り場が登場 6 News in English 英文記事を読んでみよう 7 Visit a Global Company 住友商事株式会社 8 9 	<ul style="list-style-type: none"> Key to Success 成功する留学の法則/ Book Review 10 Scholarship List 奨学金情報 11 IELTS World IELTS Hot News 12 	<ul style="list-style-type: none"> IELTS World IELTSテストのコツ 13 IELTS World IELTS 対策コースナビ/攻略本 14 Study Abroad Benefits 留学で培う3つの力 15
--	--	--	--

Global Leader's Voice

グローバルリーダーインタビュー

実体験が成長の糧となる まずは海外に飛び出そう

Vol.4 沼田 貞昭さん

鹿島建設株式会社顧問
一般社団法人日本英語交流連盟会長
元在カナダ特命全権大使

高校留学の経験から外交官になる夢を持った沼田貞昭さん。実際に外務省に入省してからも、英語をはじめ学ぶことを継続し、外交官として大役を歴任されてきた経験をもとに、これからのグローバル人材に求められる能力や現代の日本の若者に対する想いを語ってくれた。

留学先で実感した「対外発信」の必要性

「父親は銀行員で、外国とは縁がない家庭で育ちましたが、なぜか中学生の頃から英語というものに関心はありました。当時、ポップソングに興味があったことも関係していたのかもしれませんが。高校でも英語部に所属していました。長年外交官として勤められた沼田貞昭さんは、自身の幼少の頃を笑顔でこう述べた。

「3つ上の姉が高校生のときに AFS という団体を通して留学をしたことで、私も高校時代に留学に興味を持ちました。そして実際に、沼田さん自身も AFS でアメリカに留学をした。これが高校3年生の7月のことである。

「コネチカット州にある私立の The Choate School という全寮制の学校に留学することが決まっていたのですが、学校から送られてきたパンフレットを見て違和感を覚えたんです。ぱらぱらと冊子をめくってみても、女性の姿がまったく写ってない。実は男子校だったんですね(笑)」

ケネディ元大統領の母校だというこの学校

に沼田さんが通っているとき、ケネディ氏は大統領に選出された。折しも日本国内では、日米安全保障条約に対する反対運動で国全体が揺れ動いていた時代でもある。

「寮に入る前にステイをしていたホストファミリーやそのご近所、そして学校でも、みんなから『なぜ、今日本では学生が騒いでいるんだ?』とよく聞かれました。当時は必死でその理由を説明していましたが、今思い起こすと、この経験がきっかけで外交官になろうと決めたのだと思います。対外発信をしていかなければならないと強く感じたのです」と沼田さんは当時を振り返る。

外国人との接し方にカルチャーショック

高校に入学してから留学するまで、ラジオの米軍放送などを聴いて英語力を磨いた。

「会話はかなりできると思っていたのですが、留学先では、Writing——書くことに本当に苦労しました。毎週月曜日の1時間目が



『English』という授業だったのですが、毎回与えられたテーマに沿って500語のエッセイを書く。日本ではやったことのない初めてのチャレンジで、前日の晩はいつも徹夜をして必死に書いていました」

在学中は English の授業のほかに、数学とフランス語、そしてアメリカ史も勉強した。日本の高校でも学んでいたフランス語と、数学は問題なかったというが、アメリカ史も相当な苦労をされたようだ。しかし、時間が経つごとに確実に点数が上がっていき、完全な

英語ネイティブスピーカーじゃなくても大丈夫なんだ、と感じたという。

日本とアメリカの授業の違いのほかにも、カルチャーショックを受けたことがある。

「アメリカ社会はほかの国と比べると、外国から来た人を歓迎して、彼らを Assimilate (同化) させようとするのだと感じました。でも、こちらにもアイデンティティがあります。アメリカには留まらず、日本に帰って外交官になる夢をすでに持っていた私には、少しおせっかいに感じることもあったのも事実です」

英語力維持に役立った 同時通訳のアルバイト

アメリカから帰国し、無事に大学受験を終えて、東京大学に進学した。外交官になると決めていた沼田さんは、養った英語力を維持するためにどんなことをしたのだろうか。

「ある程度話すことができるようになった後に進歩しなくなる人が多いため、継続して英語を使っていかなければいけないと思いました。東大のESSにも入りましたが、実際にはこちらの活動にはあまり参加せず、同時通訳のアルバイトを始めました。まさに On the Job Training というわけです」

当時は同時通訳のプロがあまりいなかったため、トレーニングを数回受けてすぐに同時通訳のブースに投げ込まれた。

「大学1年生のときに原水爆禁止世界大会で初めて同時通訳の経験をしました。そのあと、村松増美さんが設立に携わったサイマルインターナショナルでも同時通訳のアルバイトを続けました。こうした実践の機会に恵まれたことが、英語力の維持に役立ったのです」

外務省への入省が決まっていた大学4年次には、ディベート大会にも出場されたそう。このとき初めて、東京大学がアカデミック・ディベートで優勝したという。

考える力も鍛えられた オックスフォードの授業

外務省では、研修のためイギリスに行く場合、オックスフォード大学ケンブリッジ大学で2年間学ぶことになっていたが、沼田さんはオックスフォード大学に留学した。外務省に入ってから7月のことである。学位を取ることを義務付けられていたわけではないが、与えられたチャンスを無駄にせず、英国人の学生なら通常3年かかる学士号の取得を、2年で取れるよう努力を重ねた。

「オックスフォード大学の授業はマンツーマンのチュートリアルと呼ばれる形式で行われていましたが、とにかくハードだったのを覚えています。教授から毎回トピックが与えられ、それに関するリーディングマテリアルも渡されるのですが、これが本10冊などという分量。しかもどこを読めばいいといった指示はないので、答えに該当しそうな箇所を自分で探すしかありません。さらに、与えられた質問に対する答えをエッセイにまとめて、次の授業で読み上げます。それを教授が批判し、二人で議論をする。私の場合は Philosophy, Politics, Economics の学位を2年間で終わらせなければならなかったため、この授業を1週間に2回ずつやっていました」

そんなある日、特に苦勞していた Philosophy の先生に聞いてしまったんです。『なぜこんなことをやらなければならないんでしょうか?』と。先生はこうおっしゃいました。『脳を鍛えているんだ。いつか必ず役に立つよ』。まさにその通りで、今振り返ってみても、このチュートリアルの経験は本当に役に立ったと思います」

高校生のときも書くことで苦勞をされた沼田さんだったが、オックスフォード大学でも書くトレーニングを実践的に受けていたのだ。

「オックスフォードの試験も、日本の試験とは毛色が違いました。日本では論点をすべて押さえれば優がつけましたが、オック



外国語を学ぶときには、 まず「書く」ことを重視します。

スフォードではそうはいきません。論点を押さえつつ、何かきりめく自分のアイデアを組み込まないといい成績はもたない。みんなと同じ意見では意味がないのです。こうして、考える力も同時に養われたのだという。

国際社会で発揮された 英語力とリーダーシップ

イギリスから帰ってさまざまな国の大使や公使などを歴任された沼田さんだが、自身のキャリアで印象に残っていることとして、ジュネーブで軍縮会議日本代表部の参事官を務めたことを挙げられた。

「私が議長を務めていた作業部会で、化学兵器禁止条約の策定を進めていました。これは多数決では決められないので、さまざまな意見をまとめてコンセンサスをとらなければなりません。つまり、全員の主張を収斂させなければならぬ。つくづく根回しの必要性を感じました。海外でも根回しが必要なんです。誰がどういう発言をしそうか事前に想定し、自分の収斂させたい方向に持っていく。どういう順番で発言させるかも重要です。セッションが終わると議長はサマリーもしなければなりません」

英語だからこそ言いにくいことも言いやすくなるような状況もあったという。

「ある国の人が延々と話を続けるので、議長としてそろそろ止めなければと思っていましたが、日本語ではなかなか言えないことが、英語であれば慇懃無礼にしろと言える、という場面もありました」

在パキスタン特命全権大使を務めていたときには、アメリカで「9.11」が起こった。

パキスタンの外務次官との面談や、在留邦人をなんとしても日本に帰すという使命があり、緊張の連続だったという沼田さん。英語力もさることながら、リーダーシップが問われる場面が多々あったという。

伝えたいメッセージは 3点にまとめよう

外務報道官なども経験されている沼田さんが、メッセージを対外的に発信する際に気をつけていることはなんだろうか。

「まずは 'Know your audience' —— 聞いている人の立ち位置や立場を考えなければいけません。一方的に自分の言いたいことを発信しているだけではだめなんです。さらに、伝えたいメッセージを3点に絞り、それぞれに対する理由も3点にまとめます」

要点を3つに絞ることによって、聞き手の印象に残りやすくなるのだそう。さらに沼田さんはこう続ける。

「私の経験上、3つと言っているのですが、興味深いことに、東京オリンピック招致の最終プレゼンテーションをプロデュースしたニック・パーリー氏も同じようなことをおっしゃっています。彼の著書『世界を動かすプレゼンター〜日本はこうしてオリンピックを勝ち取った!〜』は大変素晴らしいので、ぜひ大学生の皆さんにもおすすめしたいですね」

実際に、2011年3月11日の東日本大震災の後、英国のBBCからインタビューを受けた際にも、伝えたい要点を3点書き出して取材に臨んだという。

「自分の言いたいことをあらかじめまとめておくことはとても大切です。伝えたいことが明

快であれば、難しい質問をされたときも、自分の伝えたいメッセージに回答をうまく結びつけて臨機応変に対応すればいいのです」

想いを伝える訓練に 活用できるディベート

いまの日本の学生に対して、憂いていることがある。

「日本人の留学生が減っているのはとても残念なことだと思います。日本の中だけでやっていけばいいという風潮があるように見受けられますね」

さらに、英語力に関してはこう話す。

「グローバル・コミュニケーターとして丁度止のやり取りができるような力を身につけるためには、IELTS など4技能を測れる試験を活用して英語力を磨いていくべきだと思います。Writing や Speaking もきちんと測った方がいい。お隣の韓国や中国にも太刀打ちできるようになりたいものです」

アメリカやオックスフォードの留学経験から思うことですが、語学力・英語力はまず書くことからきちんと身につけるべき。単純な和文英訳ではいけません。自分が持っているボキャブラリーで自分の伝えたいことをいかに最大限に表現できるか。これは、エッセイを大量に書いていたときに私も直面した問題です。外交官時代にフランス語、インドネシア語、そしてウルドゥー語も少し勉強しましたが、外国語を学ぶときは必ずエッセイを書かされました。英語を学ばれる皆さんも、新聞記事を読んで感想を書いてみたり、日記をつけてみたり、書くことは怠らないでほしいですね」

日本人は日本語で文章を書くこともあまりないので、日本語から始めてみるのもいいかもしれない、と付け加える。

「日本人は、筋道立ててメッセージを組み立てる訓練が欠けてしまっています。その訓練にディベートを活用することは有効だと思います」

沼田さんは現在、鹿島建設株式会社の顧問をしている傍ら、日本でパラメンタリー・ディベートを広める活動をする一般社団法人日本英語交流連盟の会長も兼任している。同連盟では6月に社会人英語ディベート大会、10月には大学対抗英語ディベート大会を主催し、日本人の英語力やディベート力向上に寄与している。こういったところから、今後のグローバル社会で日本を背負って活躍する人材が出てくることだろう。

最後に、大学生の皆さんに力強いメッセージをいただいた。

「まずは外に出てみる。海外に出て、実際に身をもってさまざまな経験をするのが、非常に大切だと思います」

(英検グローバルリーダー研究グループ 伊藤南美)

沼田 貞昭 (ぬまた さだあき)

1943年、東京都生まれ。東京大学法学部卒業。オックスフォード大学修士(哲学、政治、経済)。1966年に外務省に入省し、北米第一課長、軍縮会議日本政府代表部参事官、在英国特命全権公使、外務報道官、在パキスタン、カナダ特命全権大使などを歴任。2007年に退官し、2009年まで国際交流基金日米センター所長。2007年より鹿島建設顧問。2011年より日本英語交流連盟会長。2012年2月より在日カナダ商工会議所特別顧問会長。